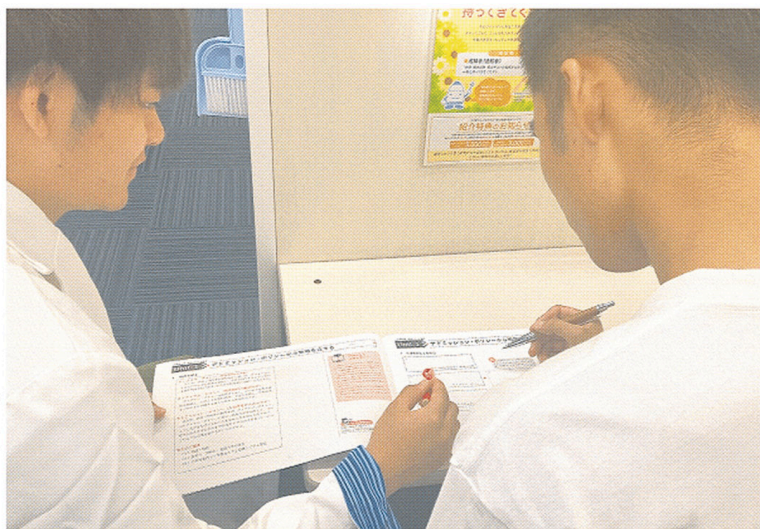


大学受験で総合型選抜（旧AO入試）と学校推薦型選抜の受験生が増え、塾・予備校の対策講座が人気だ。両選抜は12月までに可否が出るため「年内入試」と呼ばれ、学力を測る一般選抜よりも早期に合格が決まることから受験生の人気が高まっている。大手の塾・予備校が対策講座を増やしており、小論文や面接などに備えたい受験生らの需要をとらえている。

「予想以上の反響だ」。個別指導塾運営の東京個別指導

増える「年内入試」、対策講座が活況

講師と対話、自分を深掘り



東京個別指導学院は7月から年内入試の対策講座を始めた（東京都小金井市）

学院の担当者は驚く。7月かたところ、入会の問い合わせから年内入試の対策講座を始め、が相次ぎ、受講生が想定を上

回っている。生徒には専用テキストを渡し、「志望校に対するイメージ」「大学で学びたいこと」などについて書いてもらう。授業で講師は「なぜそう思ったのか」と繰り返し質問。これまで気づいていなかった具体的なきっかけや出来事、エピソード、感情の動きなどを生徒自身から引き出す。経験に基づいた動機を整理することで、志望理由や小論文などが書きやすくなるほか、一貫性が出て説得力が増すという。

7月上旬から受講している東京都内在住の高校3年の男子生徒（18）は「総合型は準備が大事と分かっているが、何をすればいいか分からなかった」と話す。高校生活の大半が新型コロナウイルス禍で

「アピールできる経験が少なかった」と思っていたが、受講を通じて「自身の長所やエピソードを見つけ、深掘りすることができた」と話した。河合塾は5月からオンラインで対策講座を開いている。志望理由や将来ビジョンなどをまとめた「じぶんカルテ」を作成。講師との会話を通して深掘りし、言語化していく。受講生は定員の9割に達している。

参考書市場では対策本も売れている。学研ホールディングスによると、2021年10月に発刊した「7日間で合格する小論文」の売れ行きが好調だ。年間7000〜8000部の販売で絶好調と言われる高校学習参考書市場で、発売から7刷を数え、発行部数は2年間で約3万部にのぼる。

文部科学省によると、22年度の国公私立大への入学者のうち、49・7％が総合・学校推薦型だった。総合型は8万4908人、学校推薦型は22万7457人だった。特に私立大では57・5％が総合・学校推薦型だ。日本私立学校振興・共済事業団の23年度の調査では、全私立大の53・3％（320校）が定員割れとなっており、年内入試が広がる背景には、大学側が入学者を早期に囲い込みたい思惑があるとみられる。

これまでの塾・予備校では一般選抜・共通テスト対策の学力向上が重視されていた。推薦対策は個別対応に限られ、力を注ぐ教室は少なかった。年内入試が主流になるなか、受験生の対策講座の需要は高まっており、年内入試対策に特化した授業を展開する動きが広がりをみせている。

（鎌田旭昇）